論文要旨

いじめ問題は、在校生の心身ともに大きな被害をえる学校教育問題だけでなく、良い社会環境づくりにも有害とみられる。いじめに関する研究は各国で既に数十年ほど行われ、大きな成果を続々と取りながら、まだまだ足りないところもある。本研究は中国のＮ市にある二つの中高校の四クラスの生徒たちと教師たちを対象にした調査研究を用い、学校の状況を調べ、勉強を促すための学級集団作成と学級内の人間関係の状況の関連性を研究し、いじめ行為を招く要因を考察する。結果を分析するため、学級集団作りがいじめ行為に対する影響を注目する日本の先行研究、及び学校内の集団作りのより根本的な目的を掲示した中国の中高校教育に関する研究を参考にし、中国社会にある激しい受験競争の社会環境を踏まえて思考する。また、社会の一環と言える学校は社会的生産に合わせるため、己の中で価値/資本の産出と増殖を維持して学級雰囲気を作り上げて中の人々に守らせる過程を論説できる近代大陸哲学及び社会学、また集団を内面化する人間の主体性を掲示した精神分析の理論で分析する。結果としては、より深い分析でいじめ問題の普遍性を討論し、いじめ問題に対する新たな見方や解決と予防策を考える。

これから、各章の内容をまとめて紹介する。

第1章において、研究の背景と目的を紹介する。いじめ問題に対する研究は現在少ないとは言えない。日本においては、何十年をわたって更新されているいじめ問題対策があるのみならず、多数の学科によるいじめ問題研究も豊富である。ところが、いじめ問題とは一国の問題ではなく、外国にも存在するため、海外のいじめ問題との比較研究が必要である。ところが、本研究は比較研究を行わず、中国で調査研究を行うだけである。中国の学校教育の中、学生に目標を与えてそのための学生の努力と日常的な行為を評価するやり方は日本と同じく存在する。また、中国の学校教育問題は、単なる「学校の問題」のみならず、社会にある経済産業にかかわるものだと指摘した中国教育の研究からみれば、中国の問題に対する研究は学校教育問題のより社会的で深い角度に光を当てることができる。そこから見れば、社会環境の影響からのいじめ問題研究に対して中国のいじめ問題研究は大きな意義があると言える。

第 2 章においては、学級集団といじめ問題の関連性を検討した日本の先行研究と中国のいじめ研究動向について説明した。日本におけるいじめ問題研究は数多くあり、その中学級集団（の集団性）からいじめ問題の発生原因を分析する研究も沢山である。むしろ、集団形成の視点からのいじめ問題に対する分析は日本のいじめ研究のある「伝統」と言える。とことが、学級集団の構造に対する分析にはまだ足りないところがある。また、中国のいじめ研究も数多くであり、その中、学級集団に注目する研究もある。ところが、中国のいじめ研究には、いじめ定義と調査範囲、また全国的な相関データを手に入れるのが難しいなどといった問題がある。中国のいじめ研究はすでに幅広いと言えるが、学級集団の視点からのいじめ問題研究の分野において、学級集団の形成原因からその中で発生したいじめ問題と学級集団の関連性に対する更なる研究は必要である。

第3章においては、哲学と社会学、及び精神分析の理論を引用し、社会環境の需要に応じる学級集団は如何にいじめ問題と関連するかを論じた。まずは、ヴァルター・ベンヤミンの暴力批判理論を引用し、暴力としてのいじめ問題を如何に定義するかを検討した。また、暴力批判を続けたスラヴォイ・ジジェクの著作を引用し、学級集団内で発生した問題と学級集団の関連はどう見るべきかを検討した。それに加え、ジョルジョ・アガンベンの「ホモ・サケル」を引用し、学級集団内の生徒はいつも「学級集団」という環境に定義されているものである。ゆえに、いじめ問題もその環境に応じる産物と言える。また、竹川郁雄が学級集団作成の過程とそれとともに存在する問題を引用したが、ピエール・ブルデューとルイ・アルチュセール、ミシェル・フーコー、そしてジジェクの理論もまた

引用し、竹川の不足を補い、学級集団自身は何故いじめ問題を引き起こす危険性があるかを論じられた。

第 4 章において、中国 N 市で行われた社会環境の需要に応じる学級集団形成といじめ問題の関連性に関する調査研究を紹介した。本研究は中国江西省 N 市にある 2 つの中学校の現場で 4 つのクラスの生徒216人の間でアンケート調査を行った。それに加え、2 つのクラスの担任の教師を対象に電話でインタビュー調査を行った。 受験競争の社会環境に応じる需要と学級集団形成の関わりを検証するため、本研究は異なる学校の間の学力の差異を変数として 調査研究を行った。アンケート調査は「先生の権力」、「学級内の人間関係の状況」。「学生が勉強に対する緊張感」、「学校安全といじめ対策に対する認識」といった 4 つの項目46個の問題を設定して 2 つの中高校にある 4 クラスの生徒に回答を依頼した。それに加え、2人の担任の教師を対象にしたインタビュー調査によって教師の役割を確認し、学校教育の現状と教師の理念もわかれた。生徒たちに実施した担任の教育理念に対する評価の計量的な分析と、インタビュー調査に協力した教師から説明を受けたそれぞれの教育方法の分析を通して、受験競争の影響のもとで、受験能力を伸ばすのを目指す学級集団形成は集団内の生徒の行為と観念に影響を与え、ストレスにもかかわることが掲示された。

最後、第 5 章は研究のまとめとして、研究からわかった社会環境の需要に応じる学級集団形成と生徒のいじめ行為の関連性を述べた。調査研究の中で示された学級集団形成とは、集団成員が自分の目標を達成するためにお互い競争できる能力を育つ機能を持つので、保障を提供しない団結と言える。お互いに仲良しすると教えられながら、競争相手として勝ち取らねばならない矛盾に生きている生徒たちは学級集団からストレスを受ける。そのような学級集団自身はそもそも「いじめ的」と言える。また、そのような問題は中国だけでなく、生徒たちをある目標を達成するために働かせる教育が存在すれば発生するので、「ブラック校則」のような学生の権利を損しても「統一性」を追求する問題が発生した日本の教育にも参考になるのである。また、制限された範囲でしか行われなかった調査研究を拡大し、社会環境の需要に応じる学級集団作成の視点からいじめ問題対策を考えることを今後の研究で行いたい。